

## ●はしがき●

アメリカや英国などでは、犯罪学が独立した学問としての地位を確立しており、犯罪学部をもつ大学まで存在する。一方、日本においては、犯罪学は法学、社会学、心理学そして医学などの下位領域としての位置づけであり、当然のことながら犯罪学部のある大学はない。それでももちろん日本に犯罪学の専門家はいる。しかし、彼らは犯罪学者である前に、法学、社会学、心理学、そして医学などで学問的トレーニングを積んだ専門家であり、それぞれの学問領域をバックボーンにして、犯罪という問題に取り組んでいる。そのため、日本における犯罪学の概論書の多くが、著者の出身の学問領域にウエイトがおかれたものとなっており、取り扱う分野に偏りが見られる。犯罪の多くは短絡的で努力を要しない行為であるが、それをコントロールすることは、犯罪を行う当の本人にとってはもちろん、社会にとっても容易なことではない。このような一筋縄ではいかない犯罪に対処するためには、多様なアプローチによる解明・対処が必要である。そのためにも、なるべく特定の分野に偏らない犯罪学のテキストが望まれる。

また、日本の犯罪学の将来を考えると、実証研究についての理解とその成果の蓄積をさらに進めていく必要がある。思弁的・理論的なだけでなく、実証的であることも重要だということは、近年のエビデンス重視の流れから広く知られるようになってきている。しかし、実証的な研究を行うにあたって注意しなければならないことや、正しい方法論についてまで浸透しているとは言えないだろう。これからの犯罪学のテキストは、新しく犯罪学を学び、そして発展させていく者のためにも、実証研究の紹介や実証的方法論についてもページを割いて説明していく必要がある。

以上のような問題意識から、本書は生まれた。法学、社会学、そして心理学という異なった学問領域出身の犯罪学の専門家3人が集まり、それぞれの分野から盛り込むべきテーマを持ち寄り、検討の上、重要と思われるものを選んだ。さらに、本書では、実証的な研究の紹介やその方法論についてもなるべく含めることとし、とくに統計学や研究の方法論に関することでそれぞれ章を設けることとした。章や節は各著者で分担し執筆しているが、草稿段階で何度か互いに目を通し、意見交換を経て最終的に仕上げている。このような作業が可能になったのは、いずれの著者も出身の領域にとらわれず、これまで幅広い研究活動を行ってきたことと、実証研究の経験をもちその重要性を十分理解しているからであろう。

本書が企画されてから完成するまでずいぶんと長い年月を要した。その間、担当者であり、本書執筆の機会を作ってくださった掛川直之氏には多大なご迷惑をかけてしまった。また、編集担当を引き継いでくださった杉原仁美氏にも大変お世話になった。最後になるが、心からお礼と感謝を申し上げる。

2017年6月

岡本英生・松原英世・岡邊 健